

<その他>

【エッセイ】

## 上沼克徳先生の思い出

恩 藏 直 人

上沼先生、この度は古稀を迎えられ、心よりお慶び申し上げます。本来であれば、研究成果の一端をお示しして、先生の退職記念号に加えていただきたいところですが、限られた時間で研究成果の準備が整いませんでしたので、「上沼克徳先生の思い出」を述べさせていただくことでお許しいただければと存じます。

1982年、今からおよそ40年前になります。早稲田大学商学部を卒業した私は、そのまま早稲田大学大学院商学研究科に進学しました。指導教授は学部のとくと同じ原田俊夫先生でしたが、学部の同期の仲間たちは、皆、就職していきましたので、私一人大学に居残りしたような気持ちでした。

期待と寂しが入り混じった気持ちで、大学院のゼミに入りました。同期入学には台湾からの留学生が一人、他に修士課程に数名おり、博士後期課程には3名の先輩がいらっしゃいました。上沼先生はそのうちのお一人で、博士後期課程4年生として在籍されていました。私たちのゼミではマーケティング研究に取り組んでいましたが、当時、比較的新しい学問として、注目されていたように思います。指導教員である原田先生は、我が国におけるマーケティング研究の草分けのお一人でした。

上沼先生も私も学部の原田ゼミ出身ですが、もちろんそれまで面識などはなく、お名前も存じ上げていませんでした。そもそも、私は大学院の存在をほとんど認識していませんでしたので、新しい世界へ飛び込んでいったという気持ちでした。

複数のメンバーがいる中、ゼミが始まると、上沼先生の存在感が一気に高まっていきました。それは2つの面からです。一つは、上沼先生の研究内容によるものです。学部では、製品ライフサイクル、市場セグメンテーション、顧客ニーズなどと言った一般的なマーケティング用語ばかりを耳にしてきた私にとって、上沼先生の発表のときには、方法論、科学哲学、カール・ポパーなど聞きなれない、さらには聞いたこともない言葉や人名が次々に出てきます。上沼先生は、その後も一貫して「学問としてのマーケティング」を研究対象として取り組み、博士学位を取得されています。学問的な探求心をブレることなく貫き、ご自身の研究成果を発信され続けました。

私の研究領域は上沼先生の研究領域とは距離がありますが、上沼先生が取り組まれてきた研究領域の存在を大学院生のときから知ることができたのは、研究者としての私の大きな財産になっていると感じています。

上沼先生の存在感を高めていたもう一つの面は、ゼミ後の食事会における会話です。長野県飯田市のご出身ということで、長野?なまりの独特な口調で、常に会話の中心にいらっしゃいました。ゼミの後には、毎週決まって6~7人程度で食事をしていたのですが、恐らく会話の半分くらいは上沼先生がお話しされていたのではないのでしょうか。時折、厳しいこともおっしゃっていましたが、常に人としての温かみがあり、会話からは裏表のない人柄が感じられます。上沼先生を深く理解している人であればあるほど、先生を高く評価されるのは、先生のお人柄によるものだと思います。

上沼先生と接点のある方は、ご存知のことと思いますが、先生は腕時計のコレクターです。恩師の原田先生の会などでお目にかかる機会があると、毎回のよう新しい腕時計を着けていらっしゃいます。しかも、それらはパテック・フィリップ、ブレゲ、カルティエ、ジャガー・ルクルトなど、一本百万円以上もするものばかりです。もちろん、腕時計だけではなく、靴もバッグも服も一流品で、身だしなみには気を遣われていました。上沼先生と接することにより、私は多く的高级ブランドを教えていただきました。

私が教授に昇任して、しばらくした時のことです。上沼先生が私の腕時計を見て、「なんだ、恩蔵」。「教授にもなって、そんな品のない時計をするな」と言われたことがあります。知らない方が聞くと、なんてひどい言い方だと感じるかもしれませんが、上沼先生によるこうした言い方には慣れていましたので、言葉そのものには特に気にしませんでした。ただ、上沼先生の言葉で、「少しいい時計を買おうかな」という気分になったことは事実です。

しばらくして、新しい腕時計を買いました。その後、お会いした時に上沼先生が私の時計を見るなり、「恩蔵、いい時計してるな」「そういう時計でなきゃいけない」とほめてくれました。私は上沼先生ほど、たくさんの腕時計を持ってはいませんが、腕時計に興味を持たせてくれたのは、間違いなく上沼先生です。

上沼先生とは、大学院の恩師を囲む原田会があつて、毎年、お会いさせていただいておりますが、私から見た印象としては最初に出会った時とほとんど変わることなく、若々しくてエネルギーギッシュで、様々な話題を提供してくれています。上沼先生とお会いすると、変わることはない先生に接して、私自身も若返った気持ちになることができます。上沼先生には、これからもお元気でいていただき、私たちを励まし、ご指導いただきたいと思っています。